



Title	スタール夫人『ルソーに関する書簡』における天才の概念
Author(s)	植村, 実江
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2017, 51, p. 101-116
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71400
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スタール夫人『ルソーに関する書簡』における 天才の概念

植 村 実 江

キーワード：スタール夫人／ルソー／天才／女性／魂

スタール夫人の最初の作品である『ルソーに関する書簡』（以下、『ルソー書簡』）は、少なくとも名目上は、ルソーを称賛することを目的とする作品である。ルソーは女性が男性の領域を侵すことに反対したが、スタール夫人はそのようなルソーの女性観をどのようにとらえていたのか。この二人の作家の関係についてはこれまでも少なからぬ研究者が注目してきた。スタール夫人がルソーについて論じる際、ルソーの女性観の問題は避けて通れるものではなかったはずだが、『ルソー書簡¹⁾』においてはこの問題を扱うことを避けているという研究者の指摘もある²⁾。この作品において、スタール夫人は「唯一ルソーに苦言を呈したい」として、「女性は情念と真実をもって愛を描くことができない」というルソーの言説に異を唱えている³⁾。換言すると、ルソーは女性の天才を否定し、スタール夫人はそれに反論した。女性を天才から排除することは、女性の能力を劣ったものとし、男女の領域区分の根拠とする論理のヴァリエーションである。従って、スタール夫人のルソーへの反駁は、男女の領域区分への反駁に他ならない。本論ではこの部分に注目しつつ、ルソーが女性に欠けているとした能力について考察し、スタール夫人がそれに関してどのようにとらえていたか検証したい。

1. 『ルソー書簡』序文における執筆の目的

アンヌ・ジェルメーヌ・ネッケル・ド・スタールはフランス革命の前年、

1788年に『ルソー書簡』で文壇にデビューした。当時彼女は22歳で、スウェーデン大使と結婚してスタール男爵夫人になってから2年たった。この作品の正式名である『ルソーの作品と性格に関する書簡』*Lettres sur les ouvrages et le caractère de Jean-Jacques Rousseau*からもわかるように、内容はルソーの作品と人物像についての考察になっている。全体は序文と七章からなり『エミール』（1760）と『新エロイズ』（1761）の二作品はそれぞれ一章が与えられ、特に多くのページが割かれている。

序章においてスタール夫人は、この作品を書いたのはルソーに賛辞を贈るためだと述べている。しかしながら作品全体を通して見ると、ルソーの女性観に反対する心情が読み取れる。ルソーの主張によると、女性は従属的な存在であり、男性を喜ばせ、男性の役に立つのが女性の本分である。そして「学識ある女性は夫、子供たち、友人たち、使用人たち、みなにとって災いである⁴⁾」として、彼は学識ある女性を強く非難した。ルソーにとって女性の *bel esprit*（知性）は、役に立たないどころか害悪でさえあったのだ。このようなルソーの女性観に照らし合わせると、ルソーの信奉者として彼を賛美することと、女性作家として自らの才能を発揮し、ルソーの作品を批評することとは明らかに矛盾すると言えるだろう。

女性作家としてペンをとるとき、スタール夫人は父親のジャック・ネッケルとルソーに対して、常に後ろめたい気持ちをもっていたと指摘する研究者もいる。⁵⁾ ネッケルは、フランス革命勃発の時期にルイ16世の財務総監でもあった有力人物である。彼は女性作家を嫌悪しており、妻シュザンヌの執筆活動にも反対していた。⁶⁾ スタール夫人に父親やルソーに対する自責の念が本当にあったかどうかは別として、『ルソー書簡』の序文では作品執筆の動機について説明し、書くことの必然性を主張している。序文の冒頭を次に示す。

Il n'existe point encore d'éloge de Rousseau : j'ai senti le besoin de voir mon admiration exprimée. J'aurais souhaité sans doute qu'un autre eût peint ce que j'éprouve ; mais j'ai goûté quelque plaisir en me retraçant à moi-même le

souvenir et l'impression de mon enthousiasme. J'ai pensé que si les hommes de génie ne pouvaient être jugés que par un petit nombre d'esprits supérieurs, ils devaient accepter du moins tous les tributs de reconnaissance.⁷⁾

(ルソーへの賛辞はいまだひとつも存在しない。そこで私は、私自身の賞賛の念が形になるのを見たいという思いに駆られた。誰かが私の思いを書いてくれることを、願うにとどめておくこともできたであろう。しかしながら私は、熱狂の思い出や印象を自分自身に向けて物語ることで、何らかの喜びを味わった。少数の優れた人々からしか、天才は評価されることができないとしても、少なくとも感謝のしるしであればすべて受け取ってくれるはずだと思ったのだ。)

はじめに「ルソーへの賛辞はまだ誰も書いていないので、自分が書いてみたいと考えた」というスタール夫人の執筆の動機が述べられる。しかしながら、段落の最後の「感謝のしるしであれば受け取ってくれるだろう」という部分には、自分の楽しみとして書くというだけではなく、さらに正当な理由を説明したいという意図が見える。ここには年若い女性が偉大な作家について論評することに対する、世間からの批判を見越していたことが示されている。当時、女性は結婚するまでは親の支配下にあり、結婚することによって初めて大人として認められるという事実があったので、すでに男爵夫人となった彼女が一人前の大人とみなされていたとすることができるかもしれない。しかしながら彼女の作品が「若い女性による」ものとして注目されたことは、『ルソー書簡』に対する出版当時の書評を見てもわかる。⁸⁾ グリムの主宰する『文芸通信⁹⁾』では『ルソー書簡』に好意的な書評が掲載されたが、「これが22歳の女性のものであると知ったらさらに驚くだろう」という評者のコメントが見られる。¹⁰⁾ 感謝の表明であるという体裁をとったことには、高名な作家を批評するという行為を正当化する意図が表れており、そこには作者が「女性はものを書くべきではない」という言説を充分意識していたことが示されている。ルソーがいかに学識ある女性を敵視していたか、次の章で検証する。

2. ルソーによる女性の天才の否定

スタール夫人と同時代のイギリスの女性作家メアリ・ウルストンクラフト（1759-97）は『女性の権利の擁護¹¹⁾』（1792）のなかで、女性を男性に従属する存在だとする考えに反論し、女性も知性を備えた人間として一個の人格をもつことを認めるべきだと主張した。彼女はまた、ルソーの考えを擁護しているとしてスタール夫人をも厳しく批判した。ウルストンクラフトが指摘するように、スタール夫人は『ルソー書簡』のなかで、たしかに「ルソーはお許しを得た（sa grâce est obtenue）¹²⁾」と書いている。しかし、ルソーはすべてのことについて責を逃れたわけではなかった。この文の後にも議論は続く。

Cependant le seul tort qu'au nom des femmes je reprocherais à Rousseau, c'est d'avoir avancé, dans une note de sa lettre sur les spectacles, qu'elles ne sont jamais capables de peindre la passion avec chaleur et vérité. Qu'il leur refuse, s'il veut, ces vains talents littéraires, qui, loin de les faire aimer des hommes, les mettent en lutte avec eux ; [...].¹³⁾

（しかしながら、女性を代表して一つだけルソーをとがめるとすれば、『演劇についての手紙』の注のなかで示された、女性は熱情と真実をもって情念を描く能力を決してもたないというルソーの発言である。ルソーは例の、彼に言わせれば無益な、女性が男性を愛するよう仕向けるところか、女性を男性とライバル関係におくあの文学の才能を、女性はおつべきではないとした〔中略〕。）

「女性は熱情や真実で情念を描く能力がない」というルソーの主張の真意はどのようなことであろうか。『演劇についての手紙』というのは『ダランベールへの手紙』のことを指している。スタール夫人が言及している注の部分を以下に示す。

Les femmes, en général, n'aiment aucun art, ne se connoissent à aucun, et n'ont aucun Génie. Elles peuvent réussir aux petits ouvrages qui ne demandent que de la légèreté d'esprit, du gout, de la grace, quelquefois même de la philosophie et du raisonnement. Elles peuvent acquérir de la science, et de l'érudition, des talens, et tout ce qui s'acquiert à force de travail. Mais ce feu celeste qui échauffe et embrase l'ame, ce génie qui consume et dévore, cette brulante éloquence, ces transports sublimes qui portent leurs ravissements jusqu'au fond des cœurs, manqueront toujours aux écrits des femmes ; [...].¹⁴⁾

(概して女性は、いかなる芸術も好まず、いかなることにも精通せず、いかなる天才ももっていない。いくらかの軽妙な才知、いくらかの趣味、いくらかの上品さ、時には哲学的なものや、論理的なものだけでこと足りる、小さな作品を作り上げることはできる。女性は学識や教養、才能、そして努力すれば身につくことなら何でも、習得することができる。しかし、魂を熱くし燃え上がらせるあの天上の炎、消耗しむさぼりつくすあの天才、あの燃えさかる雄弁、彼女たちの喜びを心の奥深くまでもたらすあの崇高な激情が、女性の著作にはつねに欠けているであろう [中略]。)

この文脈では、「Génie」という語は人間の能力のひとつを表す語として使われている。現代は「誰々は天才だ」というように、「Génie」という語の人を指す使い方が一般的だが、このような意味での使用はロマン主義以降とされている。¹⁵⁾

この引用部分は、ルソーが女性の天才を否定した根拠としてフェミニズムの文脈でよく取り上げられる。¹⁶⁾最初の文でルソーは「aucun」を3回繰り返し使用して、女性の能力の欠如を強調している。女性に「Génie」がないとした上で、「機知に富んだ軽妙なもの」「趣味のよいもの」「優美なもの」すなわち小さな作品に向いており「科学」「知識」「才能」も努力すれば習得できるが、「燃えさかる雄弁」や「崇高な激情」は女性の手が届かないものだと断言する。

様々な特性を「男性的」と「女性的」に区別しようとする考えは、ルソーだけのものではない。ルソーに類似した男性的/女性的の区分としては、エドモンド・バークの崇高論があげられる。バークは『崇高と美の觀念の起源』（1757）において、「崇高」を男性的なもの、「美」を女性的なものにとらえて両者を対比させた。バークによると、荒涼たる風景、不気味な山、雷鳴や稲妻など、人間に恐れを抱かせるようなものは「崇高なもの」と分類され、それらは男性的なものである。それに対し「美」は小さなもの、なめらかなもの、繊細なものである。バークは「女性的なもの」とは男性（英語の men）が異性に対して魅力的に感じるものであると説明した。バークの主張は、上品さを女性の特質とし、小さなものに優れているが崇高さに欠けているというルソーの女性観と、大筋で一致している。ルソーやバークの主張からは、強さ＝男性、かわいらしいもの＝女性のような、性別による図式化された特性が認められる。さらにルソーには、否定語の多用により、男性より女性の能力が劣っていることを明示しようという意図が読み取れる。

先ほどの引用に続いて、ルソーはさらに女性の書くものに欠けている要素として情念や魂をあげている。

[...] ils [= les écrits des femmes] sont tous froids et jolis comme elles ; ils auront tant d'esprit que vous voudrez, jamais d'ame ; ils seroient cent fois plutôt sensés que passionnés. Elles ne savent ni décrire ni sentir l'amour même.¹⁷⁾

（女性の書くものはすべて、それを書く女性たちと同じく、冷たく愛らしい。あなた方が望むだけの知性もあるが、魂がないのだ。それらは情念よりもむしろ、100倍の分別からできていると言っても過言ではあるまい。女性たちは、愛さえ描くことも感じることもできないのだ。）

ここではルソーが女性に「冷たい」という属性を与えていることが特徴的である。パタースビーは「アリストテレス（紀元前384-322年）は、男はホットでドライ、女はコールドでウェットであると主張した。すなわち、男の優

越性は、男の体が女のそれより大きいこと、そして生殖器が体内の内側でなく、外側に向かって発達していることにあらわれている。熱は成長に必要なのだ。アリストテレスによれば、女はより劣った男（a lesser man）である。女はある種のモンスターあるいは異常であり、受胎期間の熱の不足により、十全な（＝男の）機能を発達させることができないのだ¹⁸⁾と説明している。ルソーの「女性の書くものはつねに冷たい」という言説は、アリストテレス由来の、西洋における伝統的な女性の属性を踏襲したものである。この注の最後の部分では、ルソーは天才をもつ女性を「例外」としてあげている。

La seule Sapho, que je sache, et une autre, méritèrent d'être exceptées. Je parierois tout au monde que les *Lettres portugaises* ont été écrites par un homme.¹⁹⁾

（唯一サッフォー²⁰⁾と、そしてもう一人の女性は、例外に値する。賭けてもいい。『ポルトガル文²¹⁾』は、男性によって書かれたに違いない。）

ルソーは、サッフォーが愛を描くことができると認めながらも「例外」であると片付ける。また、『ポルトガル文』の作者は後に男性であると見られるようになったが、ルソーの時代には作者不詳であった。「作者は男性に違いない」という主張はルソーの慧眼であると言えるものの、そこにはすぐれた作品を女性が書いたと信じない、女性の天才を強く否定するルソーの考えが示されている。バタースビーはスコットランドの美学者であるウィリアム・ダフ（1732-1815）を例にとり、「女性が天才をもつことは否定され、女性に天才が認められると例外として片づけられる²²⁾」と主張しているが、ルソーのこの態度はその典型だと言えるだろう。

3. スタール夫人によるルソーへの反論

女性には天才がないというルソーの主張に対する反論として、スタール夫人

はまず、女性の優れている点について説明する。

C'est par l'âme, l'âme seule qu'elles [= les femmes] sont distinguées : c'est elle qui donne du mouvement à leur esprit ; c'est elle qui leur fait trouver quelque charme dans une destinée dont les sentiments sont les seuls événements, et les affections les seuls intérêts ; [...]²³⁾

(女性が優れているのは、魂だけによるものである。魂だけが女性の精神に動きを与えるのだ。感情が唯一の出来事であり、愛情が唯一の関心であるという運命において、魂だけが、何か魅力となるものを彼女たちに見つけさせるのだ [中略]。)

スタール夫人は魂 *âme* において、女性は特に優れているのだと力強く主張している。魂は女性を際立ったものにする。つまり、魂こそが女性の美点であり、魂において女性は男性より優れている。そして、その魂によって、女性が天才をしのぐ書き手となりうるということを、スタール夫人はこの続きの文で示している。

Ah! quand elles rougiraient d'employer ce langage brûlant, signe d'un délire insensé plutôt que d'une passion profonde, elles sauraient du moins exprimer ce qu'elles éprouvent ; et cet abandon sublime, cette mélancolique douleur, ces sentiments tout-puissants, qui les font vivre et mourir, porteraient peut-être plus avant l'émotion dans le cœur des lecteurs, que tous les transports nés de l'imagination exaltée des poètes.²⁴⁾

(ああ、深い情念というよりはむしろ、正気を失った妄想の象徴であるあの「燃えるような言語」を用いるとき、女性たちが頬を赤く染めたと²⁵⁾しても、自らの感じるものを少なくとも表現することはできるであろう。そして、女性の生と死を決定するあの崇高な自己放棄、あのメランコリックな悲痛、あの全能の感性が、読む人の心の中へ感動を呼び起

こし、詩人の高揚した想像力から生まれるあらゆる陶醉よりも、さらに奥まで届けることだろう。)

「正気を失った妄想の象徴」という言葉からは狂気が連想されるが、古くから天才と狂気は結びつけられてきた。プラトンが『パイドロス』で詩人と狂気を結びつけ²⁶⁾、その後も繰り返しこの関連付けが行われる。バタースビーによると、ルネサンスの新プラトン主義者たちは、このプラトンの見解をすべての芸術創造に広く応用した。²⁷⁾ また、前述の「男性はホットでドライ、女性はコールドでウェットである」というアリストテレスの定義が示すように、「燃えるような言語」は男性と結びつく。これらのことからわかるように、スタール夫人のいう「燃えるような言語」とは、天才が使う表現能力のことを指していると考えられる。本来、天才かつ男性のものとされる「燃えるような言語」を使い女性たちが頬を赤く染めたとしても、「崇高な自己放棄」「メランコリックな悲痛」「全能の感性」のような女性特有の要素によって、女性も詩人の想像力をしのぐ可能性をもつというのが、スタール夫人の主張である。

「読者の心の中に感動を呼び起こし」というのは「読者に精神の高揚 « enthousiasme » を引き起こさせる」と同義であろう。ここでは、女性においてとりわけ卓越している魂による精神の高揚に光が当てられている。スタール夫人のこのような主張には伏線がある。この前の段落で、スタール夫人はルソーの文体について論じている。そこでは、ルソーの文体の完璧さが、ときに人々から称賛されることに疑問を呈し、それよりむしろ、ルソーの文体の特筆すべき点は「魂」にあると述べている²⁸⁾のだ。それはビュフォンとの比較において提示される。

Une grande propriété de termes, une simplicité remarquable dans la construction grammaticale de sa phrase, donnent à son [=de Rousseau] style une clarté parfaite : son expression rend fidèlement sa pensée ; mais le charme

de son expression, c'est à son âme qu'il le doit. M. de Buffon colore son style par son imagination ; Rousseau l'anime par son caractère : l'un choisit les expressions, elles échappent à l'autre. L'éloquence de M. de Buffon ne peut appartenir qu'à un homme de génie ; la passion pourrait élever à celle de Rousseau. Mais quel plus bel éloge peut-on lui donner, que de lui trouver, presque toujours et sur tant de sujets, la chaleur que le transport de l'amour, de la haine, ou d'autres passions, peuvent inspirer une fois dans la vie à celui qui les ressent ²⁹⁾ ?

(きわめて的確な言葉の選択、文章の文法的構造における傑出した簡潔さが、彼 [=ルソー] の文体に完璧な明晰を与えている。彼の文章は忠実に彼の思考を表現する。しかし、彼の文章の魅力、それは彼の魂のおかげなのだ。ド・ビュフォン³⁰⁾氏においては、想像力がその文体に色彩を与えている。それに対してルソーは、彼の人格によって文体に生命を吹き込んでいるのだ。前者は言葉を選ぶが、後者においては言葉が自ら口から出てくる。ド・ビュフォン氏の雄弁は天才をもつ者にのみ属するものだ。だが、情念はルソーの雄弁にまで高まりうるのだ。ルソーにこの上なく美しい賛辞を贈るためにはこう言えるのではないだろうか。愛の恍惚、憎しみ、そしてその他の情念の高みによって、人生の中で一度それらを感じる者に引き起こされうる熱情が、ルソーの書くもののなかにはほぼつねに、これほどまでに多くの主題において見出されるのだと。)

ここではルソーの属性を明確にするためにビュフォンとの比較が行われている。ビュフォンには「想像力」「天才」という属性が与えられているのに対し、ルソーには「情念」「熱情」「魂」という表現が使われている。ルソーの言葉は彼の口から自然とあふれ出るものであり、それはビュフォンのように想像力を駆使してつくられるものではなく、ルソーの人そのものである。スタール夫人はそれを « chaleur » であるとしている。この « chaleur » によってこそルソーは称賛されるに値するのだ。この説明はさらに続く。

Son [= Rousseau] style n'est pas continuellement harmonieux ; mais lorsque son âme est émue, on trouve dans ses écrits, non cette harmonie imitative dont les poètes ont fait usage, non cette suite de mots sonores, qui plairait à ceux même qui n'en comprendraient pas le sens, mais s'il est permis de le dire, une sorte d'harmonie naturelle, accent de la passion, et s'accordant avec elle, comme un air parfait avec les paroles qu'il exprime.³¹⁾

(彼 [=ルソー] の文体はつねに調和を保っているわけではない。彼の魂が感動に打ち震えているときに彼の書くものに見出されるのは、詩人たちが用いるあの模倣の調和や、その意味が理解できない人々にさえ気に入られかねない、よく響く言葉の連なりによってもたらされるものではない。ルソーの文体は、このような言い方が許されるとすれば、一種の自然な調和、情念の調べであり、かつ、それは情念と混然一体となっているのだ。まるで、一節の完璧なメロディーが、その歌詞と調和するように。)

ここでいう詩人とはもちろん天才のことである。スタール夫人がビュフォンにみとめている要素は伝統的な「天才＝詩人＝神の模倣者」という既成概念にもとづいている。それに対し、ルソーの特性には、情念や魂が結びつけられている。バタースピーも指摘するように、ルネサンスの天才は神の模倣者であった。³²⁾ ロマン主義以降、模倣者としての天才よりもむしろ天才の独創性、人格、オリジナリティが強調されるようになる。この意味で、創作者の人格に根差した芸術創造を強調したルソーはロマン主義の先駆ととらえることができる。そして『ルソー書簡』においてルソーの人格やオリジナリティを称揚したスタール夫人にもまた、ロマン主義の先取りをみとめることができる。さらに、スタール夫人はルソーにみとめた魂、情念といった要素を、女性においてこそ際立っている要素としている。スタール夫人はルソーにおいて従来の天才の概念をとらえ直し、さらには女性特有の要素とルソーにおいて特筆される要素の親和性を見出している。スタール夫人のルソーの称揚は、女

性が天才にひけをとらずに書けるという可能性を強く裏付けている。

ところで、「(女性たちが書くことによって、詩人よりも)感動をさらに心の奥まで届けることだろう」という条件法の言説は、控えめな語調を保っている。しかしながら、女性が天才を凌駕する可能性があるという主張そのものは、きわめて大胆な発言であると言える。スタール夫人が断定的に「女性でもできる」と書いていないのは、大胆な発言であるゆえ、反発をおそれて語調を抑えているからだと言えるかもしれない。一方、才能をもって書くこと自体がルソーへの反証となるのだから、最初の作品の段階ではその可能性を示唆するにとどめ、その後の作家活動において女性の天才を証明しようという大望が秘められているという推測もなりたつのではないだろうか。

* * *

スタール夫人は、ルソーを論じることで従来の天才の概念をふまえつつ、新しいロマン主義の天才の概念を打ち出した。さらに、ルソーの天才にみとめられる魂にルソーの女性的な側面を見出し、女性の文学的才能の可能性を示した。スタール夫人は、男女の領域を区分する壁を取り払うことに挑んだが、この作品にはその原点が示されている。スタール夫人はルソーと正面衝突することを巧みに避けながらも、女性が文学的才能をもつ可能性を主張している。スタール夫人がここで提起した問題は、のちの『コリンヌあるいはイタリア』における女性の天才や、作家としての軌跡を振り返り、才能を与えてくれた神への感謝を表明する『ルソー書簡』第2序文へと引き継がれていくのだ。

[注]

- 1) 使用テキストは、*Lettres sur les ouvrages et le caractère de Jean-Jacques Rousseau, Œuvres complètes de Madame la Baronne de Staël-Holstein, publiées par son fils*, 1820-1821, Tome 1, (reprint Slatkine, 1967)。本論におけるすべての日本語訳は拙訳による。
- 2) Larg, David Glass, *Mme de Staël, la vie dans l'œuvre*, Champion, 1924, p.86.
- 3) Mme de Staël, *Lettres sur Rousseau, O.C.*, p.5
- 4) « Une femme bel esprit est le fléau de son mari, de ses enfants, de ses amis, de ses valets, de tout le monde ». Jean-Jacques Rousseau, *Émile, Œuvres Complètes* IV, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 1964, p.768.
- 5) « Towards both (= Rousseau and Necker), and in fact men in general, she (= Mme de Staël) would always feel her underlying need to atone for being a woman and yet speaking so loudly and with so much authority ». Madelyn Gutwirth, “*Mme de Staël, Rousseau, and the Woman Question*”, publications of the Modern Language Association of America, 86, 1, 100-109, 1971, p.100.
- 6) Gutwirth, p.103.
- 7) Mme de Staël, *Lettres sur Rousseau, O.C.*, p.1.
- 8) 後述するメアリ・ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護 (1792)』にもスタール夫人を「a young encomiast」とする記述が見られる (*A Vindication of the Rights of Woman, The Works of Wollstonecraft*, Janet Todd & Marilyn Butler (eds), William Pickering, 1989, vol.5, p.173)。
- 9) 『文芸通信』 *Correspondance littéraire* は、グリムが主筆をつとめる少数の手書きの文芸雑誌。
- 10) 『文芸通信』 1789年1月号
- 11) *A Vindication of the Rights of Woman*, 1792. ウルストンクラフトは本書において、ルソーが『エミール』で示した女性観に異を唱えた。本書は近代フェミニズム理論の古典とされている。
- 12) Mme de Staël, *Lettres sur Rousseau, O.C.*, p.4.
- 13) *Ibid.*, p.5.
- 14) Jean-Jacques Rousseau, *Lettre à d'Alembert, Œuvres Complètes* V, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 1964, p.94.
- 15) Christine Battersby, *Gender and Genius : Towards a Feminist Aesthetics*, London, The Women's Press, 1989. p.71. バタースビーは、本書において、西洋語の「天才」を指す語（フランス語の *génie*、英語の *genius*）の起源について詳しく説明してい

る。バタースビーの説明を梅垣が要約した部分を引用する。「天才」(genius)という言葉には「ゲニウス」(GENIUS)と「インゲニウム」(INGENIUM)という二つの起源があった。「ゲニウス」とは、古代ローマの原始農業共同体において、家族や氏族の守護天使として崇拜された霊のことで、これは男性の生殖能力を神格化した概念であった。一方「インゲニウム」とは、芸術家が美を生み出すために必要な「器用さ」を意味する概念で、[中略]いずれの系譜からも天才を男性のものとする発想が受け継がれた」。(梅垣千尋、「女天才」の称揚とその波紋—18世紀後半イギリスにおける女性と創造力—、青山学院女子短期大学総合文化研究所年報(16)、81-104, 2008-12, p.82)

- 16) Battersby, p.36.
- 17) Rousseau, *Lettre à d'Alembert*, pp.94-95.
- 18) Battersby, pp.28-29.
- 19) Rousseau, *Lettre à d'Alembert*, p. 95.
- 20) サッフォーは、ギリシャの女流詩人で前 610 年～ 580 年頃活躍した。作品の大部分は恋愛を主題としている。
- 21) 『ポルトガル文』*Lettres portugaises* は、ポルトガルの修道女が帰国してしまった恋人のフランス人将校にあてた 5 通の手紙からなる。1669 年にフランスで匿名で出版された。現代ではフランス人男性作家 Gabriel de Guilleragues の作品と考えられている。
- 22) Battersby, p.79.
- 23) Mme de Staël, *Lettres sur Rousseau*, O.C., p.5.
- 24) *Ibid.*, p.5.
- 25) 「頬を赤く染めたとしても」という文章には、抑えきれない感情の高ぶりが表現されているが、英文学者の久守和子によると、この身体的特徴は徳の高い者の証であると考えられていた。18世紀後半には「苦悩に鋭敏に反応する感性」が礼賛され、悲しみや苦しみという負の感情に鋭敏に反応し、弱者に深い共感を示す人物が描かれる感傷小説がさかんに読まれた。彼らの抑えきれない感情は「紅潮した頬」、「失神」、「溢れる涙」という語で表現される。男女を問わず、これらのアクションは洗練され、徳高い者の特徴とされていたのだ。(久守和子『オースティンの<日常>の魅力を探る—映画『いつか晴れた日に』を中心に—』、「ペンをとる女たち」、翰林書房、2003 年、56 頁)
- 26) If any man come to the gates poetry without the madness of the Muses, persuaded that skill alone will make him a good poet, then shall he and his works of sanity with him be brought to naught by the poetry of madness [...]. Plato, *Phaedrus*, [c.370 BC], trans. R. Hackforth, Cambridge University Press, 1952. p.245A.

- 27) Battersby, p.31.
- 28) Mme de Staël, *Lettres sur Rousseau, O.C.*, p.3.
- 29) *Ibid.*, p.4.
- 30) ビュフォン (Buffon, Georges-Louis Leclerc, Comte de, 1707-88) は、フランスの博物学者で、啓蒙思想家。医学、植物学、数学に通じた。
- 31) Mme de Staël, *Lettres sur Rousseau, O.C.*, p.4.
- 32) Battersby, p.26.

(大学院博士後期課程学生)

La notion de génie dans *les Lettres sur Rousseau*, de Madame de Staël

Mie UEMURA

Mme de Staël inaugure sa carrière d'écrivain en 1788 par la publication de son premier ouvrage, les *Lettres sur J. J. Rousseau*, où elle reproche à ce dernier de refuser le talent littéraire aux femmes. Le célèbre citoyen de Genève ne prétend pas que les femmes soient dépourvues de toute forme de talent, mais il affirme qu'elles sont privées du génie qui transporte les lecteurs dans un ravissement sublime. Une telle position se fonde sur une catégorisation des caractères humains par le sexe, dont la logique aboutit à justifier la nécessité d'une subordination des femmes aux hommes, en raison de leur différence naturelle. On peut dès lors attribuer une valeur fondatrice à l'opposition précoce de Mme de Staël à Rousseau, sur la question de la division à instaurer ou à éviter entre les sphères respectives des hommes et des femmes, dans la mesure où sa vocation d'écrivaine et son ambition d'exercer une influence publique y puisent tout leur sens et toute leur force. Ce premier ouvrage paru sous son nom mérite donc une étude approfondie, par laquelle nous tenterons de mettre en lumière les idées primitives de Mme de Staël sur la condition des femmes, et son appréciation du potentiel de génie qu'elles portent en elles.